2025 年の雨水（うすい）は 2 月 18 日です。

立春が過ぎ本格的な春を迎える予備期間ともいえる頃で、降る雪は雨に変わり、
積もった雪や張った氷は解け、水になっていきます。
実際にはまだ雪深い地域もありますが、厳しい寒さが和らぎ暖かな雨が降ることで、
雪解けが始まる頃です。
雨水になると雪解け水で土が潤い始めるため、農耕の準備を始める目安とされました。

「春の霞(かすみ)」微細な水滴が空中に浮遊するため、遠方などがぼんやり見える現象。
その際に見えるうっすらした雲のようなものを「霞」といいます。
現象としては霧(きり)と同じですが、春に発生するものを「霞」、
秋に発生するものを「霧」と呼び、区別することがあるそうです。

～春なれや名もなき山の薄霞(うすがすみ)～　松尾芭蕉

山の麓や湖にかかる霞は、時に幻想的でもあります。
名もない山に、薄くたなびいている霞を見て、春を感じている様子がうかがえます。

「沈丁花（じんちょうげ)」は 2 月から 3 月にかけて咲き出す花で、夏の梔子（くちなし)、
秋の金木犀（きんもくせい）と並んで三大香木といわれます。

枝の先にはいくつもの小さな花が手まりのようにかわいらしく
集まってつきます。
花の色は白や黄色、ピンクなどがありますが、特によく見かけるのが
つぼみは濃い紅色で、花びらは淡いピンク色が混ざり合った色です。
沈丁花という名前は、花の香りが「沈香」に似ていることと、十字型の花の形が香辛料の
丁子（クローブ）に似ていることからつけられました。

『福寿草』は新年を祝う正月の花としてよく知られ、昔から栽培されてきました。
まだ寒さが残る時期に山吹色の花をつける福寿草は、春を告げる花として親しまれてきました。
２月まだ雪が残っている地面から芽を出し黄色い花を咲かせる。
たくましい花です。

つぼみから太陽に向かって花びらを開き、太陽を追って花は首を傾ける。
夜になると花びらは閉じ、翌朝の太陽で開花する。
花びらの中央に指を差し込むとほんのり暖かい、
集光器の役割を果たしています。
福寿草(フクジュソウ)は、新春を祝う花として昔から縁起の良い花として親しまれています。
名前の由来は、早春に花が咲くことから「春を告げる花」として江戸時代に
「福告ぐ草（フクツグソウ）」と呼ばれるようになり、その後、「寿」に差し替わり、
「福寿草（フクジュソウ）」となったようです。

そのほか元日草（ガンジツソウ）、元旦草（ガンタンソウ）、朔日草（ツイタチソウ）、賀正蘭などたくさんのお正月にまつわる別名があるのは、福寿草（フクジュソウ）が旧正月にあたる２月に花を咲かせるのが由来とされます。お正月の縁起ものとしてよく使われる赤い実をつける南天（ナンテン）と組み合わせて飾られることが多いのは、南天（ナンテン）を「難を転じる」とし、「難を転じて福となす」という意味合いで組み合わせられています。

『なずな』は春の七草の一つですが、日当たりの良い道端でお目にかかる”ペンペン草”と言ったほうがピンとくる方も多いかもしれません。

麦の栽培とともに渡来し日本に根付いたと言われる史前帰化植物です。
夏になると枯れる　⇒　夏無（なつな）
撫でたいほど可愛い花　⇒　撫菜（なでな）
など、名前の由来には諸説あります。
お馴染みの”ペンペン草”は風に揺れたときに鳴る音から付いたもの。
この他に、果実が三味線の撥（ばち）に似ていることから”三味線草”とも呼ばれます。
春の七草の代表とされるナズナは、寒さの中でもロゼット（バラ型）と呼ばれる葉を放射状に地上に並べ、花茎を伸ばして花をつける準備をしています。やがて立春が過ぎ、三寒四温の頃になるとごく小さな白い花を密集して咲かせ、春の訪れを告げてくれます。

『梅』は 桜と並んで古くから日本人に愛される花で、
奈良時代は「お花見」といえば 梅を鑑賞していたそうです。
桜と並んで古くから日本人に親しまれている梅。
雨水のころに優しい香りの可愛らしい花が見頃を迎えます。

＜梅の名所＞
偕楽園（茨城県）
曽我梅林（神奈川県）
兼六園（石川県）
いなべ市梅林公園（三重県）
北野天満宮（京都府）
太宰府天満宮（福岡県）　など

この時期から春にかけて降る雨は「養花雨（ようかう）」や「催花雨（さいかう）」と呼ばれ、梅や桜など春の花の開花をうながすと言われています。
こうした土や水が動き始める雨水は、昔から農業の準備を始める目安とされてきました。
　春一番が吹くのもこの頃ですが、気候が不安定なので突然大雪が降ることも。